

みなさん先生

森田たもつ

「いまから十一年前です。一九九五年、九月十八日。全長一四二メートル。総工費は九十九億円でした」

宮古島市内のホテルから乗ったタクシートの中年運転手は、那小^{なこ}大橋が開通した年をふと尋ねると、ラジオの音を低めて、まるで目の前の資料でも読み上げるような口調でおまけまで付けて淀みなく答えた。

観光客などによく聞かれるので、すっかり暗記してしまっただろうと、窓外に眼をやりながら仲村正春は思った。

車は平良^{ひらら}の市街地を抜けて県道を走っていた。畑の端に停めたトラクターのそばで夫婦らしい二人が昼食を摂っている。正春は懐かしいものでも見るように眼を細めた。

やがて集落にさしかかった。軒下に赤いポストを立てた小さな商店がある。シーサーの鎮座した赤瓦の古家が、傾いで隣の家によりかかっているように見えた。

二十五年前とはすっかりその表情を変えて

いた街中と違って、遠い異郷の地で想った、
ふるさとの原風景にふれるようだった。

ラジオが軽快なサンバのリズムを打つ。張
りのある男性歌手の歌声をどこかで聴いたよ
うだと思っていると、運転手の声がした。

「お客さん、どこからきたんですか？」

「ブラジルです」

正春が答えると、一瞬間があつて、

「ブラジル！」

頓狂な声が車内に響いた。よっぽどおどろ
いたのか、「アガイ、ほんとうな？」と運転手
は強い宮古訛りで聞き返した。

「ええ」

白髪頭を揺らしながら正春は、ディアマン
テスというバンドの曲だ、と思い出した。

歌い手は日系ペルー三世だと自分で話して
いた。一昨日、コンベンションセンターで行
われた、世界のウチナンチュー大会のフィナ
ーレを飾ったコンサートのことだ。四日間
にわたった祭典には、世界各国から三千人余

りの沖縄県出身者が集った。

「じゃ、お客さんブラジル人？」

ルームミラーの中に興味深そうに見開かれた眼が映り込んだ。

「ええ、でも生まれは宮古ですよ」

「へえー」とまた運転手は妙に感心したような声を上げた。

正春は白い開襟シャツの前で腕を組んだ。耳慣れた陽気なサンバが哀愁を帯びて聴こえるのは、いましがたから胸のうちでかすかに揺れている、三人の子供らの面影のせいだろうか。正春は低く長い息を漏らした。

「ああ、そうか、お客さん移民したのか」

運転手は納得したように頭を揺らした。自分の親戚もハワイに移民したと言い、ミラー越しに親しげな笑顔を振りまいた。

外の景色は、海が近いことをどことなく感じさせた。アダンの間を抜け、雑木林が途切れるとふいに、コバルトブルーの海と銀色に光る那小大橋が現れた。きらめく海の眩しさ

に正春は一瞬瞼を閉じた。すると、雨に濡れた黒い橋が脳裏をかすめた。

「みなさん先生」

耳の奥では自分と呼ぶ声がかすかに聞える。

佐久本かつや。

平良やすこ。

平良のぼる。

胸のうちに正春は子供らの名前を呼んだ。

「那小島は面積二、八平方キロメートル。人口約六百人で、主な産業は漁業です」

那小島に渡ると運転手は先ほどと同じ調子で案内をした。それをなんとなく遠くに聞きながら、肩を引いて橋を振り返った。

「日新橋」

思わず正春の口からこぼれた。

「えっ？」

「いや、なんでもない」

正春は運転手に首を振った。

子供らとは、日新橋で別れた。台湾の基隆^{ジーロン}の運河に架かっていた、あの橋で。六十一

年前のその光景が窓のガラスに滲んだ。

海を右手に、車は島の中へと入って行く。

民家を改造した洒落たカフェやレストランが正春の眼をひいた。大型バスが、土産品店の並んだ駐車場に止っている。青いタイル貼りの便所の前に観光客の長い列ができていた。

「山城荘でよかったですよね」

運転手は確認した。

「そうです」

「山城荘のおばあ、この間亡くなっただけど、百八歳だったらしい。ダイズサゴイ長生きだ。ずっと島のツカサだったらしいけど、跡を継ぐ人はいるのかねえ、いなかったら大変だ。那小はカン高い島だから」

運転手はひとり言のようにそう口にした。

緩やかにカーブしながら、車が那小の港にさしかかると正春は急いで窓を開けた。身を乗り出すようにして外を見る。運転手が気づいて減速してくれた。

小型漁船が係留された港内は閑散としてい

る。思い出のこもった港を前にして、正春は胸を熱くした。

こんなに小さかったろうか。記憶にある那小の栈橋はもっと広がった。漁師や露天で商売をする女たちの那小訛りの言葉が飛び交っていた。平良からわざわざ鮮魚を買いにくる人もいて、いつもにぎわっていたものだ。

古い二階建てが眼にとまった。

「那小漁業組合」と灰色にくすんだセメントの壁に記されている。建物は変わったが、漁協はたぶん、戦時中もあの場所にあったはずだ。子供らを疎開先の台湾へ送り出す日、その前で最後の訓示をした。

風景がしだいにセピア色に染まり始めた。当時のレンガ造りの漁協前に三人の子供らが立っている。かつやがとがめるように、やすこはひどく悲しげに、のぼるは今にも泣きそうな顔で、こっちを見ている。

正春は島にきたことを後悔しかける。が、唇を強く嚙んでそれを追い払った。

二十五年前は、自分の意気地のなさからどうしても那小島に近づけなかった。そのことをどんなに悔やんだことか。

「お客さん、那小には前にも？」

「若い時分に、那小小学校に勤めていたよ」
正春はシートに体を沈めた。

先生が、黒板に「将来の夢」と書いた。

「来週の月曜までに五年も六年も原稿用紙の五枚、なりたい仕事ややりたいことについて作文を書いてきてね」

那小小学校の純平のクラスは、五年生八人、六年生五人の複式学級だ。去年まで通っていた那覇の小学校は、五年生だけでも百人ぐらいだったから、同級生が二十分の一に減った。おまけに六年の男子は純平一人だけ。

だから、サッカーチームはない。五年の男子と二人、毎週土曜と日曜に平良ひいらの小学校まで通っている。送り迎えは、純平と、五年生の母さんが交代でやってくれる。

先生は五年生から順番に名前を呼んで、先週の算数のテストを返し始めた。

「ねえ、なんになりたい。私は美容師」

「私はまだ決めていない。作文どうしよう」

前の席の女子が小声で話し合っている。

純平は窓の外を見た。運動場の真ん中に、大枝を広げたガジュマルがある。那小小ができるずっとずっと前からそこにあつたらしい。

ガジュマルを見ながら、将来の夢について考えてみた。低学年の頃は、那覇のアパートの近くの中華料理屋のおじさんがきびきびとラーメンを作るのがカッコよくて、コックさんになりたいと思った。

プロのサッカー選手にもなりたかった。でも、今は週に二回しかチームと一緒にできないから減多に試合に出してもらえない。それに、来年入学する中学にもサッカー部がなくて、やるとしたらまた平良まで行くことになる。忙しい母さんのことを考えたら、サッカーは続けられないかもしれない。

はーっと思わずため息をつく。那覇に戻りたい。海しかない那小はもううんざり。

僕の将来の夢は、サッカーチームがあつてデパートやゲームセンターがあり、モノレールの走っている街に住むことです。ついでにおいしい中華料理屋さんがあるといいです。頭の中でそんな作文を書いていると、先生に名前を呼ばれた。

「浜川純平君、大変よくできました。今回も純平が一番よ」

先生は笑顔で答案を返してくれた。

九十八点。純平は算数が得意だ。五人だけの学年だけど、ずっと一位をキープしている。

席に戻って何げなく運動場に眼をやった純平は、わっと声を上げそうになった。机に立ってた答案用紙に顔を隠した。真っ白な人影を見たのだった。

オバケ？ ユーレイ？

純平の頭にすぐに浮かんだのは、この間亡くなった山城荘のおばあのことだった。

夏休みに、早起きして、中学生の従兄と東の浜に泳ぎに行った。フクギの間から海岸に出ると、白い着物の山城のおばあが海にむかって屈み込んでいた。手を合わせて何かぶつぶつ唱えるおばあの前で、線香が白い煙を立てていた。

家に帰って父さんに聞くと、おばあは、亡くなった島の人の魂を海のもころに見送った。逆、逆に迎えたりしているということだった。

父さんは、二年前におじいさんが亡くなって会社を辞めて那小島に戻った。おじいの跡を継いで初めて漁に出る日も、山城のおばあが安全を祈ってくれた。でも、運動場の人影には二本の足があったような気がする。

純平は確かめようと答案用紙から片目だけずらして、おそるおそる見た。

やっぱり、足はついていて。それに、両手を広げてガジュマルに抱きついたり、背伸びするようになって枝に触ったりしているのは、おばあではなく、痩せたおじいだった。

知らないおじいは、髪の毛が白ならシャツもズボンも白。靴までも白っぽい。白ずくめのおじいとふいに眼があつたような気がして、純平はなぜかあわてて顔を前にむけた。

教室がざわざわしていた。

答案を返し終えた先生が、「静かに」と大きな声で言う。それでもおしやべりをやめない五年生を「こらっ、五年」と叱りつけた。運動場にそっと眼を戻す。

あれっ？ 白ずくめのおじいは、もうどこにもいなかった。

放課後、五年の男子とパス回しの練習をして家に帰った。

「ただいま」と玄関のドアを開けると、父さんの物ではないクリーム色の革靴があつた。台所をのぞくと、油のはじける音と揚げものの香ばしいにおいがした。

「ちようどよかった。これを父さんたちのごろに持ってつてくれる」

大皿に刺身を盛っていた母さんが純平を見て言った。

「お客さん？」

「親戚のおじいちゃん。先に手を洗ってね」
白身のタマン（フエフキダイ）がきれいに
並んだ列に、母さんはきゆうりを添えた。

純平はお盆を慎重に座敷に運ぶ。居間の仏壇の前を通ると、線香をたいたあとのおいがした。座敷から父さんの声ではない、かすれたすこし高い声が聞えた。

「今の若い人たちはほとんど、スペイン語だけだよ。わしらのように日本語の話せる世代はどんどんいなくなっていく」

座敷には、母さんに言われた通り、「いらっしやいませ」と言ってから入った。

父さんとお酒を飲んでいたお客さんを見て、
純平は眼を丸くした。昼間、運動場にいた白
ずくめのおじいだった。

ユーレイじゃないにしても、やっぱり違う
世界の人のようだ。なぜかドキドキする。

「息子の純平です」

父さんがいつもと違う丁寧な口調で紹介した。純平はお盆を座卓に置くと、父さんの横で正座して、背筋をぴんと張って硬いおじぎをした。

「仲村正春です。君のおじいちゃんの従弟だ」

正春おじいちは、顔じゅうのしわを緩めたよ
うな笑顔で、腰をすこし前に傾けた。

父さんの従弟でもなく、おじいの従弟。な
んだか遠い感じがして、眼の前の白ずくめが
純平の中でふあふあ浮いていた。学年を聞か
れて答えると、わかりづらそうな顔で、「す
ると、なん歳」とまた聞かれた。

「十一歳です」と純平は答えた。

おじいは純平の顔を見ながら、「そうか、
そうか」と目を細めてうなづく。あんまり見
るので、純平は落ち着かない気持になった。

「どうぞ、召し上がって下さい」

醤油を小皿に垂らしながら父さんが刺身を
おじいにすすめる。

純平が立ち上がったって戻ろうとすると、
「せっかくだから、純平くんも一緒にどうだ。
男同士」

と引きとめられて、純平は困ってしまった。
初めて会うおじいとの会話は退屈にきまっ
ている。テレビのほうがいい。

「純平、おじいさんはブラジルで大きなレス
トランをやってるんだよ。今、ブラジルの話
を父さんも聞いていたけど、勉強になるぞ」

ブラジル、と聞いて、純平の頭の中で、カ
ナリア軍団、サッカーの神様ペレ、怪物スト
ライカーロナウド、が、くるくる回った。

サッカーの国からやってきたおじいさんに急
親しみがわいて座り直した。おじいはうれし
そうな顔を純平にむけた。

「こりこりして、甘味がある。こんな活きの
いい刺身は久しぶりだ」

タマンを口に入れて満足そうに言う。

母さんが持ってきたカツオの天ぷらを食べ
ながら、ブラジルの少年サッカーのことが聞

けるかもしれないと期待を込めて思った。

おじいが話してくるように小声で頼もうかと顔を横にむけると、父さんは純平にとってはおとんちゃんかなことをおじいに聞いた。

「ブラジルでカラオケが流行ってるって言うてましたけど、誰の曲が人気なんですか」

「若い歌手は知らんが、美空ひばり、都はるみ、北島三郎、千昌夫……」

と正春おじいは指を折った。

「演歌ですね」と父さん。

やっぱり、テレビがよかった。純平は居間に眼をやって、この時間帯の番組を思い出す。

「沖縄民謡もたまにうたわれる」

「沖縄民謡まであるんですか」

父さんがすこしおどろいたように言う。

「むかしの唱歌もあるぞ。『月の砂漠をはるばると、二人並んで行きました』」

自分の歌に合わせて白髪の頭を揺らしながら、おじいは純平にこにこ顔をむける。純平はテレくさくなって下をむいた。

「那小小学の、先生をしていたんですよね？」
父さんが正春おじいに聞いた。

だから昼間、運動場にいたんだ。純平が顔を上げると、おじいは真顔になっていた。

「むかしのことだ」

ぼそりと言って、コップに手をのばした。

「教員時代は大変だったようですね。おじさんは戦後すぐにブラジルに行ってしまったから、親父もくわしいことは知らないようでした。とくに台湾でのことは。もしよかったら、当時のことを聞かせてくれませんか」

父さんが言うとおじいは眉の間に皺をつくって唇をきゅつと結んだ。首を捻って、その難しそうな顔を壁のほうにむけると、そのまま動かなくなってしまった。

壁の上のほうには、純平のおじいとおばあさんの写真が掛っている。でも正春おじいが見ているのは、どうもそれではないらしい。

なんだか気まずい感じだ。横目で父さんを見ると、唇を突き出して困ったような顔をし

ている。

「おじさん、すいません。余計なことを」

やがて父さんは咳払いをひとつして、手でうなじをこすりながら言った。

「いや。話しておいたほうがいいだろう」

おじいは顔を戻して父さんに言い、それから純平に眼をすこし近づけると「台湾がどこにあるかわかるかな」と質問した。

純平は首を横に振った。

算数は得意だけど、社会は苦手だ。

「地図で調べてみたらいい。台湾をむかし日本は、五十年間、支配していたんだよ」

片手を広げてみせながら、正春おじいは言った。

日本とアメリカが戦争を始めたのは、今から六十五年前の、昭和十六年のことだった。

日本が占領していたサイパン島をアメリカに取られると、敵がつぎに狙ってくるのは、石垣、宮古だろうという噂は、那小国民学校

の職員室にも広がっていた。

『一家の支柱である強壯な者は残り、老幼婦女子は疎開させよ』との命令が出たのは、十九年の七月だった。

島が戦場になるかも知れないということ、十五歳以下の子供や、女の人、年寄りを九州と台湾に分けて移すことになったんだよ。

一度軍隊に入ったが自分の不注意から訓練中に右の腿を負傷して徐隊させられた後ろめたさもあって、わしは積極的に働いた。お国のために、勝つまでは辛抱しなければならないと、家々をまわって父兄を説得したのだ。

台湾組のわしの生徒八人、ちょうど純平君と同じ年頃の生徒が出発する日は、平良の漲はり水港みずにはたくさんの方が見送りにきていた。宮古から台湾へは、全部で五千人ぐらいが疎開したのではなからうか。

「みなさん先生」

生徒は口ぐちに言いながら、船の上で手を振った。朝の始めに必ず「みなさん」と切り

出すことから、わしはそう呼ばれていた。

八人のうち六人は、台湾に親戚縁者のいる有縁故疎開。あとの二人、佐久本かつやと平良やすこは無縁故の疎開だった。やすこは三歳下の弟ののぼるも一緒だった。家族が同じ船で行けなかったので、三人には、世話係として二十代の女性が付けられていた。生徒を疎開させると学校は閉鎖になった。

あれは、昭和二十年に入つてすぐのことだった。台湾の疎開者が食糧不足とマラリアに苦しめられているという情報が伝わってきた。

わしは疎開させた生徒のことを思うと、いても立ってもいられなかった。役場の友人から窮状を見舞うために町村長らが台湾へ出向くと聞いて、その船に同乗して現地に渡った。

与那国を経由して船は基隆^{ジーロン}港に入った。横なぐりの雨に迎えられた。当時の台北州の基隆^{ロシ}は、別名「雨港」と呼ばれるほど雨の多いところだった。

到着したその日から、わしは生徒のもとを

訪ねてまわった。台湾には幾度かきていたの
で、ある程度の土地勘はあった。有縁故の六
人は、それぞれの受け入れ先で無事でいてく
れたのでひとまず安心した。

しかし、かつや、やすこ、のぼるの三人は
いるはずの場所にいなかった。石垣からきて
いた疎開者に聞くと、付き添いの女性と一緒
に新営^{シンイン}に移って行ったということだった。

わしは新営^{シンイン}へ急いだ。新営^{シンイン}は、台南州の郡
のひとつで製糖が盛んだった。

途中、列車から砂糖キビを運搬するトロツ
コに乗り換えて五時間余りかかった。米軍機
の空襲が心配だったが、幸い何事もなかった。
がたがた揺られっぱなしだったから体中がぎ
しぎし痛むし、寒くもあって大変だった。情
けないことに、駅に着いたとたんに地面にへ
たり込んでしまったよ。

空襲を受けて街のあちこちが無残に破壊さ
れていた。製糖工場のレンガ造りの煙突の先
がなくなっているのを見ながら、三人の子供

らのことが心配でわしは不安をつのらせた。
郡役場で沖縄からの疎開者の所在を聞いて
むかった。だが、どの疎開所にも姿はなく立
ち寄った形跡もないようだった。

疎開所のひとつに製糖工場の宿舎があてら
れていた。なん棟か並んだ、その建物の間に
掘られた防空壕に寝泊まりして四人を探した。
壕の中は氷つくような寒さだった。ムシロ
と、宮古から持ってきた食糧と引き換えに疎
開者から借りた毛布でなんとかしのいだ。

わしは日に幾度か市場に足を運んだ。生き
るためには食べるしかない。近くに
いるならば、きつと現れるはずだと考えたのだ。

市場には野菜や果物のほかに、ゆでたトウ
モロコシ、サツマイモ、天ぷらなどの揚げも
の、時にはアヒルの肉や豚肉まで並んでいて、
食料は戦時中にしては豊富なほうだった。

新宮^{シンイン}

にきて三日ほど経っていただろうか。

その日も、幾重にも交差する市場の狭い路
地を、あたりに注意深く眼を這わせながら歩

いていた。ひとつの路地を抜けると、小さな食堂の前に人ばかりできていた。

「駄目なものは駄目だ」

店の中から厳しい声が聞えた。人垣の間から見ると入口に制服の巡査の四角い背中があった。本島人の店主が巡査にただただ頭を下げて謝っていた。本島人というのは、台湾の人のことだ。

どうやら巡査は、ヤミ米で商売していたことをとがめているらしかった。大和人の巡査は無期限の営業停止を言い渡すと、追いついて懇願する店主を乱暴に振りほどいてサーベルを鳴らして去って行った。

その頃の警察ほど怖いものなかった。むしろから巡査が歩いてくるのを見ただけで、何もしていなくても隠れる人もいたほどだ。

いくらなんでも、無期限というのはひどすぎる。困り果てたようにたたずむ店主にわしは同情した。店主はその巡査を、そして日本を馬鹿にするような言葉をぶつぶつ漏らしな

がら戻ってきた。するとわしはカッとなって、
眼が合った店主を睨みつけていた。つい今し
がたまでの同情心はどこかへ消えていた。店
主は逃げるように店へ入って行った。

その頃のわしは、大和人が本島人にきつく
あたったら、むしろ本島人のほうに味方した
い気持ちだった。だが、本島人が日本の悪口
を言ったりすると、とたんに自分の中の日本
がツノを出す。まったく妙な感情だった。

本島人の側は、大和の人と沖縄の人を区別
して見ているところがあつた。そのことを、
わしはのちに身を持って知つた。

父さんが正春おじいのコップにお酒を注い
だ。それをゆっくりと飲んで、おじいはふう
ーと長い息をはいた。

サッカーのことを知りたいと思つていたこ
とも忘れて、純平はおじいの話を夢中で聞い
ていた。父さんのコップの中身もさつきから
ほとんど減っていない。

ずっとむかし、日本が戦争をしたことは純平も知っていた。沖縄本島で戦いがあったことも、教室で先生から聞いたり、バス遠足で戦跡に行ったりしたのでわかっていた。

でも宮古の、しかもこの小さな那小島が戦争に巻き込まれていたことを知って純平は、ほんとうにびっくりしていた。那小は神様に守られた、平和な島だと思っていたのだ。

ソカイ、ソカイ、ソカイと胸のうちで繰り返す。純平はふと、自分が父さんや母さんと離れて知らない遠いところへ行くことになったら……と考えた。

絶対に嫌だ。我慢できない。むかしの子は、どうしてあんなに我慢強かったのだろう。

わしは子供らの安否を確認するまで台湾を離れるつもりはなかった。

ある夕方、市場を歩いていると、わしのオーバーと自分の売っているものを交換しないかと女性が声をかけてきた。市場では現金で

のやり取りのほかにも物々交換も行われていた。きょうも無駄足だったか。そう思うと負傷した右足が急に重くなった。引きずるように角を曲って、とくに狭い路地に入った。そこはうす暗く、じめじめしていて、いつも小便のにおいが漂っていた。

物や人を避けながらしばらく進むと、一人の少年が物売りの女性に片手の布きれのようなものを突き出して盛んに何か話しかけていた。もう片方の手では、足元の竹かごを指差している。髪がぼさぼさで、片袖しかないジャンパーを着た浮浪者のような風体のその少年が、かつやだとは思っても寄らなかつた。

少年がこっちに眼をやったかと思うと大声で何か喚きながら突進してきた。わしは思わぬ抱きとめていた。

「みなさん先生」

悲鳴のようなひと言がわしの胸を突いた。

「かつや」と叫んで、ひと目はばからず、やせ細った体を抱きしめて声を上げて泣いた。

市場の裏手にキリスト教の長老教会があった。子供らは三人だけでその納屋で暮らしていた。付き添いの女性は三人を駅に待たせたまま戻ってこなかったらしい。子供らを教会に連れて行ったのは、信者の駅員だった。

だが、食べざかりの子供らの腹を十分に満たすほどの食糧を分け与える余裕は教会にもなかった。腹が減ってどうしようもなくなるのと、物乞いのようなことをしたり市場で物々交換をして食べ物を得ていたという。

市場でかつやが女性に見せていたのは、着ていたジャンパーの片袖だった。それとサツマイモを交換しようとしていたのだ。

「いっぺんに交換したら着る物がなくなるから、すこしずつ交換しようと考えたわけ」

かつやは得意げに言って笑ってみせた。かつやは笑うと、左の頬に片えくぼができた。

「そうか、そうか」とうなずきながらわしは、オーバーを脱いで包んでやった。

仏壇の横の古い柱時計が、ギーコ、ギーコと辛そうに八回鳴った。

「そんな子供らを置いて自分だけ帰るわけにはいかないから、教会にお願いして終戦までの七カ月余りをその納屋ですごした」

「三人を置き去りにしたその女の人、ひどいことをするな」

純平も思っていたことを父さんが口にした。一度うなずいておじいは言った。

「それでも、かつやとやすこの風呂敷包みの中には、二人の親が女性に預けた現金の封筒がいつの間にか入っていたらしい。金になりそうな女性の持ち物もすこし。現金は、教会に連れて行った駅員が持ち去ったらしいが。みんな生きるのに必死だった。辛い時代だった」

おじいは、お酒で濡れたうすい唇をすぼめた。純平は天ぷらに伸ばしかけた手を止めた。なんだか、かつやくんに悪いような気がして。「トイレはどこかな」とおじいが純平に聞いた。

た。純平は案内した。

ガラスの扉のついた飾り棚をのぞいて、ほうーとおじいは首を揺らした。純平が、難しい算数の問題を解いた時の先生みたいだ。

座敷に戻ると棚のほうを指差して、

「あれと同じものが、台湾にもあったよ」

おじいは父さんに頬を緩めた。

「何がですか？」

「棚のラジオ。たぶん、同じものだ」

「ああ、親父の古いラジオね。親父は古い物でも、壊れていても捨てようとしなかった。

居間の柱時計も僕が子供の頃からの物ですよ」

そう言うと父さんもトイレへ立った。

そのラジオは、がっちりしたこげ茶色の木でできている。高さ三十センチぐらいです。こし横に長い。前から見ると、左側に純平の手のひらほどの丸い穴があいていて奥から布があてられている。右端には縦長の目盛があり、その下に木のツマミがふたつ並んでいる。

戻ってきた父さんは、すこし重そうにその

ラジオを抱いていた。座卓の上のラジオにおじいは眼を近づけた。裏のふたがなくなっていて、ほこりまみれの部品の中に電球のようなものが立っているのを純平は初めて見た。「よく見ると、違う気もする。似てはいるが」おじいはそれでも、子供の頭をそうするよりにラジオをやさしく撫でていた。そうしてまた、六十一年前の台湾へ戻って行った。

昭和二十年の八月に終戦になると、とたんに街のようすががらりと変わった。本島人は、勝った、勝ったと叫んで爆竹を鳴らし、通りを練り歩いていった。一方では、勝ったのは日本だと言う日本人もいて、騒然として不穏な空気に包まれていた。

ある日、ヤミ米で営業停止になったあの食堂の前を通ったら、戸の閉まった店の軒下に血に染まった巡査の白い制服がぶら下がっていた。それを見た時わしは、恨みに思っていた。

た店主が仕返ししたのだろう。そんなことをするのは日本が負けたからだと痛感した。

国が劣勢なのはわかっていた。だが、最後は日本が勝利するとどこかで信じていた。自暴自棄になりかけたわしを押しとどめたのは、子供らのことだった。

一刻も早く宮古に連れ帰らなければ。いくさはまだ終わっていないぞ。わしは自分に強く言い聞かせた。人の物を奪ったり、ひどい暴力を振るったり。終戦の混乱はまだ続いていたが、ともかく基隆^{ジーロン}に移ってそこで引き揚げの船を待つことにした。

列車を乗り継いで降り立った「雨港」は、やはり雨に濡れていた。基隆^{ジーロン}はとりわけ、秋から冬にかけては季節風の影響で天候が崩れやすく、海も荒れた。

駅を出ると、市街地へ続く石造りの日新橋が海から流れ込む田寮河をまたいでいた。海岸通りにある国民学校が避難所になっていると聞いていたのでそこへむかった。

雨に黒く染まった日新橋を渡りながら、すえたような河のにおいをかいだ。

「先生から離れるなよ」

わしは子供らにそうなん度も声をかけた。

ジローン
基隆

港の湾内を小型の軍船がゆつくりと進んでいた。船体の白い星印を見て、米軍のものだろうなとわしは思った。

ラジオ放送局の前を通ると戦時には聴かれなかった派手な洋楽が流れていて、子供らは珍しそうに門の中をのぞいていた。

海岸通りは、多くの建物が空襲の被害を受けていた。神社の鳥居が仰むけに倒れていた。立派だったはずの日本風の屋敷ががれきとなつて雨に濡れていた。

国民学校は、道沿いに並ぶ倉庫群のはすむかいにあり、戦禍をまぬがれた校舎はレンガ造りの二階建てだった。ムシロの敷かれた教室は、新しそうな板で区切られていた。受け入れの体制が整っているようなので、安心して事務所になっていた職員室へ行くと、ここ

は満杯だから倉庫に行くようにと言われた。
割りあてられた古倉庫はひどいありさまだ
った。いかにも急ごしらえといった感じのご
つごつした床板が延べられ、仕切りなどなく、
なん組もの家族がそれぞれの荷物や生活用具
で自分たちの場所を囲っていた。それでも、
子供らが雨風をしのげるだけ十分だと思った。

「正春せんせいシーアランナ

奥から声をかけられて見ると、顔見知りの

宮古の人だった。下地といった。

「アバおや、アザ先輩

」
思わずそう返していた。日頃、生徒には方
言を禁じていたので、子供らに気まずい思い
をしたものだ。だが自分の口から飛び出した
島言葉が、疲れたところを癒してもくれた。

下地は妻とよちよち歩きの女の子を連れて
いた。下地の妻が、子供らに乾パンを分けて
くれた。聞くと、ほかの人たちもほとんどが
宮古からきていた。やっと宮古が近くなった
ような気がして、わしはすこし安心した。

近所に、本島人のやっている散髪屋があった。引き揚げの船はいっになるかわからなかったが、わしが自分で刈った暴れ髪では、久しぶりにわが子を見る親たちが悲しむだろうと、一度ちゃんと散髪させることにした。

ところが、「日本人は駄目だ」と店主の女房が手をパンパン叩いて店先で追い払った。戦争に負けた日本人に本島人がきつくあたるところを嫌というほど見てきたから、黙って帰ろうとすると、「リュウキュウラン？」とふいに聞かれた。リュウキュウランとは琉球人という意味だ。

女房がなぜ、そう思ったかはわからない。こっちの顔立ちがそう思わせたのかも知れん。わしがうなずくと、怒りをあらわにしていたその顔からとげがなくなり、店に入れてくれた。ふたつ並んだ鏡の間にこれと同じようなラジオがあつて、蒋介石と蒋介石が率いる国民党軍をたたえる勇ましげ音楽が流れていた。のぼるが珍しそうに近寄って触ろう

とすると、やすこが姉らしくたしなめた。

奥から人の良さそうな店主が出てきて子供らの髪を刈ってくれた。散髪屋は、空襲で、ぼると同じ年の息子を亡くしたらしかった。

その日から子供らは、ラジオを聴くのが楽しみで、ちよくちよく出入りしていた。子供らにお菓子をくれたりする親切な夫婦にわたしは感謝した。

だが、複雑な気持ちもしていた。

「どうしてですか？」

父さんが正春おじいに聞いた。

「わしは日本人として誇りをもって生徒を疎開させた。だが、思わぬところで日本人ではなく、琉球人として助けられたからだ」

「あの頃の台湾から見れば、五十年間、自分たちを支配してきたのは日本であって、琉球、沖縄ではないということでしょうね」

「歴史的にみても琉球と台湾のつながりは、日本よりも古いからな」

大人たちはうなずき合ったが、純平にはうまく理解できなかった。純平は自分のことを日本人だと思っている。でもおじいは、日本人で琉球人だったという。いまはブラジル人だ。どういうけど、ほんとうはなに人？……。

二日後の十一月一日に、信光丸という船が宮古にむけて出港するという情報をもってきたのは下地だった。倉庫に歓声がわいた。

宮古に帰れるぞ。父さん、母さんに会えるぞ。わしは子供らを両手で包んで喜んだ。かつやは片えくぼみせて笑った。やすこはすこし涙ぐんでいた。のぼるはきよとんとした眼でわしを見ていた。

だが、わしにはひとつ気がかりがあった。それは、有縁故で疎開した六人の教え子のことだった。あまり時間がない。しかし、子供らを下地に預けて、船が出ることできるだけ知らせに行こうと決心した。

下地はこころよく引き受けてくれた。子供

らも初めは納得していたが、見送りに出た日
新橋のたもとで、離れたくない、先生と行き
たいと言ひ出した。

霧のような冷たい雨の降る日新橋でわしは、
きつく叱つて子供らを下地と帰らせた。

おじいがラジオに触れる。手が震えていた。
「それが、今生の別れだった」

コンジョウの別れ？……。

その意味がわからず、純平は父さんを見た。

「永遠に、別れたということだよ」

「……死ん、じゃったの？ 三人とも？」

すこし考えてからびっくりして聞くと、お
じいはラジオに眼を落したままうなずいた。

正春おじいが帰ると父さんは風呂に入った。

純平はまだ座卓を前に座っている。鉄のサッ
カーボールでも抱え込んだように動けなかつ
たのだ。

おじいが基隆^{ジールン}に戻ると船は出たあとだった。

天気が崩れ始めたので、夜の出港を夕方に早めたらしい。信光丸は壊れかかっていたオンプロで、おまけに人を乗せすぎていた。港の外に出たすぐにエンジンが故障して動けなくなり、夜になって海が荒れだすと大きな岩になん度もぶつかって横倒しになってしまった。

翌朝、海岸には、船から放り出されたたかさんの人の遺体が打ち上げられていた。やすこさんとのぼるくんもその中にいた。でも、かつやくくんはとうとうみつからなかった。

その事故で亡くなったのは百人余りだったという。けれど、正式な引き上げ船ではなかったから名簿もなく、誰が乗っていてなん人死亡したのか正確にはわかっていない。

正春おじいは二人の遺骨を抱いて那小島に戻った。先生を辞めて那覇に住んでいたけれど、三人のことがどうしても頭から離れず、逃げるようにしてブラジルへ渡ったという。「お砂糖、たくさん入れたのよ。ブラジルからのお土産、純平も飲んでみる」

母さんが手にしたマグカップは香ばしいかおりを立ち昇らせていた。

純平は生まれて初めて熱いコーヒーを飲んだ。苦くて、甘かった。母さんと眼が合うと、なんでか知らないけれど、急に涙がぼたぼた落ちてきてしよっぱさがくわわった。

車で送って行こうかという申し出を辞退して、正春は浜川家をあとにした。山城荘までは年寄りの足でもそれほど遠くない。

広い道路に出ると明るいコンビニエンスストアの店先で若者が三人、それぞれ携帯電話を手に立っていた。茶色い髪の一人が、前を通る老人にうさん臭そうな眼をむけた。

すこし行ってから正春は一瞬振り返る。若者が、島で教師をしていた頃の自分の年齢に近いことに気づいて。

島も人も変わった。変わらずにむかしの殻に閉じこもったままでは、自分のこところだけか。それでも、浜川家で三人のことを

話したおかげで、わずかだが殻がうすくなつた気がする。しかし、あした子供らの家を訪ねるまでは気を休めることはできない。

海のそばの山城荘の近くまで来た時、右足に疲れを感じて正春は立ち止まった。若い時分より、足をひくようになった。

海風が、ふいにフクギの葉を揺らす。濃い潮のにおいが正春を包み込んできた。

人は瞬く間に老いさらばえる。そうして年寄りの時間は、本人を置き去りにして前へ前へと勝手に進む。風の速さだ。だから、いまこの島にこなければならなかったのだ。

わしが自分のあやまちを悔い、最後まで悔恨の思いを持ち続けるであろうことを伝えなければ。子供らに。遺族に。手について。辛いことだが、それを成し遂げるまでは死んでも死にきれない。

疎開は時代のせいだ。時代が悪かったのだと、自分に思い込ませようとしたこともあった。もちろんごまかしにすぎない。どんな時

でも、親から子を引き離すようなことはあつてはならない。家族をバラバラにすることは。ふと、浜を洗う波の音を聞いて、正春は耳をすました。フクギの厚い葉に遮られているためか、くぐもった女性の声にも聞える。抑揚のあるその響きは、胸の奥深くしみ込んでくるようだった。

その晩、純平はなかなか寝付けなかった。明かりを消した二階の部屋のベッドで、どうしても三人のことを考えてしまう。

戦争がカッコいいような気がしていたのは、小学一、二年の頃までだ。六年のいまは違う。人と人が武器を持って殺し合うのはいけないことだ。命は大切だから。人の命は地球よりも重いから。でも、武器を持たなくても死ぬこともあるんだ。戦争がなければ、三人が父さんや母さんと離れて台湾へソカイすることもなかった。死ぬこともなかったんだ。

暗がりの中でまぶたを開いた。机のあるほ

うに顔をむける。机の上には、あの古いラジオがある。ベッドに入る前にいろいろ試してみたけれど、やっぱり壊れているようだった。大きなあくびが出た。まぶたがだんだん重くなってきた。やっと眠れそうだ。

体が、ベッドに吸い込まれていく。

純平は眼を閉じた。

………何か光るものがあつて、純平は眼をしばたいた。

ラジオがぽつと赤く光っていた。

おどろいて見ていると、小さくジーンと鳴った。いきなり大きくガーっときてすぐにやむと、一瞬、人の声のようなものが聴こえた。

壊れていなかったんだ！

純平は飛び起きた。電気を点けるのも忘れて椅子に座ってラジオにかぶりついた。ドキドキしながら光の漏れる裏側をのぞくように見、ポンと叩いてみた。すると、サーという雨のような音の中から歌声が聴こえてきた。

「月の砂漠をはるばると
二人並んで行きました」

正春おじいがうたっていた歌だ。

うたっているのは子供のようだ。一人じゃない。なんんかでうたっている。声はすぐに遠くなつて、消えた。ラジオをポンポン叩いたが、いくらやってもだめだった。

「ああ」と大きなため息まじりの声が出た。

「オゴエ！」

ラジオがしゃべった！ おどろいて純平も

思わず「オゴエ」と小さく叫んでいた。

「オゴエびっくりつてよ。何か、これ」

気味悪げな男の子の声。明かりは強くなつて、四角い箱を赤く包み込んでいる。

理由はわからないけれど、何かの回線とながつてしまったらしい。古いラジオだからそうなつてしまったのか？ でも古いのにそんなことができるの？

純平の頭はいまにも混乱しそうだ。

父さんと母さんを一階に呼びに行こうかと思つた。でも、どうしてもラジオの前を離れられない。電気を点けたら、そのとたんに声が聴こえなくなつてしまひそうな氣もする。とにかく、こっちの聲がむこうにも聞えるらしい。オゴエびっくりつて遣うからは宮古の子だろ。う。那小小かも。氣を落ち着けてラジオに口を近づけて、「もしもし」と言つてみた。すると、「もしもし」と返つてきた。

さつきと違つて女の子の声だ。

「わたしは、平良やすこ、あなたは？」

ゆっくりと区切るように言う聲は、すんだきれいな響きだった。

「ぼ、ぼくは浜川純平」

耳のうらを熱くして言いながら、やすこつてどこかで聞いた名前だな、と純平は思つた。

「ぼくは、平良のぼる」

え！ のぼる？ やすこ？

純平の心臓が飛び跳ねた。

椅子から落ちそうになつてラジオの頭に手

をついた。赤い光は純平をも包み込んだ。つばきをゴクリと飲んで、震える声で、聞いた。

「もしかしてそこ、台湾の、基隆^{ジーロン}？」

「……そうだけど」

やすこさんの声はすこし低くかった。

大変だ！ 六十一年前の台湾とつながっている。
いる。

「やすこさん、かつやくくんは？」

思わず声が裏返った。

「いまいない。なんで知ってるの、かつやのことまで。あなた誰？」

やすこさんはきつい口調で聞いてきた。

「ごめん、やすこさん。いまは時間がない。交信がいつ途切れるかわからない。」

「わかった。スパイね。あなたのような人があるから日本は負けたのよ」

のぼるくんが何か言おうとすると、やすこさんは「シート」と止めた。

「やすこさん、よく聞いて。そっちがいま何日かわからないけど、十一月一日に基隆^{ジーロン}港か

ら宮古への船が出る。それには乗らないで。
やすこさん、聞いてる？」

返事はなかった。でも聞いているような気がした。

「かつやくんにも伝えて。絶対に乗っては駄目だよ！ やすこさん、信光丸は」

その時、階段を上ってくる足音がした。

「純平、こんな時間になに騒いでるの？」

眠そうな母さんの声。その瞬間、ラジオの明かりが、吹き消されたように暗くなった。

朝食がすむと正春は山城荘を出た。

正春はまず、那小小学校の近くのかつやの家へ行くことにしていた。かつやの家は北側のセンダンの木がむかしのままだった。

気を引きしめて歩き出した。右手に下げたふたつの紙袋が擦れて音を立てる。ブラジルからのチョコレートが入っていた。

車の音がして正春は振り返った。タクシーが山城荘の門を塞ぐように停っている。ドア

が開いて運転手が出てきた。大柄な男は「先生」と呼んで足早に近づいてきた。正春は、髪のうちい男を仰ぐように見上げた。

誰だったろう。教え子だろうか。正春がわからずにいると、男は唇をぎゅつと上げて笑い顔を作つて、自分の左頬を指差してみせた。

男が何か言いかけた瞬間、福々しいその顔に、片えくぼみせて笑う痩せこけた少年の面影が重なつた。正春の手の物が滑り落ちた。

「かつやかか？」

震える声でうめくように言った。

「やっぱり、山城荘に泊つていたのは先生だったか」

「生きていたのか」

それきり言葉が喉につかえて出てこなかつた。息が詰まりそうになつて、あえぐように潮まじりの空気を吸い込んだ。かつやが手をひいて、フクギの下の石に座らせた。

夢じやなかるうか。正春はいくども眼をしばたたいた。膝がしらが小刻みに震える。

「前から見たらわからなかったはず。後ろからだからわかったんです。雨の中、足をひきひき、日新橋を渡ってジエロン基隆 駅へ歩いて行く先生の後ろ姿は、いまでも眼に焼き付いている」

「あつやは明るく言ったが、眼は潤んでいた。」

喉を押し開くように正春はようやく聞いた。

「急にまた、どうしても先生と離れたくない気持ちになって、まわれ右をして走りました。ラジオ放送局の前で」

「放送局の？」

「ええ。駅員の眼を盗んで停車場に行くとき先生がちょうど列車に乗るところだった。僕は隣の車両に飛び乗った。でも先生に怒られるのが怖くてどうしようかと迷っているうちに、寝てしまっていたんですよ、馬鹿者プリムヌだから。起きた時には、先生はもういなかった」

「あつやは笑って自分の頭を軽く叩いた。」

「宮古に帰ってきたのは？」

「あの半年後です。どこかの駅で降りたんだ」

けど、帰り方はわからんし、金はないし、腹はへる。急に悲しくなつてわんわん泣いていたら、親切なおばさんがまんじゅうを食べさせてくれて自分の家に連れて行つた。そのおばさんは本島人だったんだけど、親しくしている大和の家族に僕のことを頼んでくれて、それでなんとか帰つてこられたんです」

「そうか、そうか」
正春が差し出す手を、かつやは両手で包み込んだ。二人は深く眼を見合わせた。正春は、潰れるほどに胸をしめつけられた。体を震わせ、声をしぼるように泣いた。

憎悪の渦巻くあの混乱の中で、取り残された少年に無償の救いの手を差し伸べてくれた、本島人の女性に、大和人の家族に、こころのうちで手を合わせて深く感謝した。

「先生が泣くのを見るのは二度目だ。新営シンエイの市場でも僕のために、いや、僕らのために泣いてくれた。やすことのぼるも、先生が島にきてくれて、いま頃喜んでいるはずよ」

鼻を啜ってかつやは言った。

「しかし、なんでわしが山城荘にいたことがわかったんだ？」

いま不思議に思っただけで正春は聞いた。

「運転手仲間から聞いたよ。ブラジルからきた年配客で、那小の先生だったらしいと聞いた時、ピンときたさ。みなさん先生だとかつやは片えくぼをみせた。

フクギの間から漏れる陽光が二人を照らしていた。正春は立ち上がり、すこし背を伸ばして、かつやの頭をやさしく撫でてやった。

二〇一八年 六月

那小大橋の手前で純平は車の速度を緩めた。ラジオから、あしたの慰霊の日のニュースが流れている。

宮古の島々を洗い流すようなゆうべの大雨を、銀色の橋はまもっていた。朝の光をきらきらと照り返している。

先週、母さんからアパートの純平に悲しい
報せがあった。正春おじいが、亡くなったと
いう。

「九十六歳だったってよ。大往生だね」

電話の母さんの声はむしろ明るかった。

那小小学校の正門をくぐって、教職員用の
駐車場に車を止めた。渡り廊下の途中で、純
平は運動場の古木に眼をやった。

十二年前の正春おじいとの出会いと、その
後の親交がなかったら、教師の道へ進むこと
はなかっただろう。

ブラジルの品と一緒に届く、時には便箋十
枚にもおよぶ便りに綴られたおじいの思い、
祈りにも似た願いは、純平のところにしっか
りとひき継がれている。

純平は教室に入った。慰霊の日を前に、生
徒たちに伝えたいことはもう決まっている。

教卓に手をついて、クラスを見まわして大
きく息を吸い込む。そうして、呼びかける。
いつものように。

「みなさん！」

みなさん先生

森田 たもつ

(あらすじ)

ブラジル移民の仲村正春は、二十五年ぶりに故郷の宮古島に戻った。正春は終戦直後まで、宮古の離島である、那小^{なこ}島の小学校で教師をしていた。那小島の浜川家を訪ね、いとこの息子と、孫にあたる純平に戦時中に教えた子を台湾へ疎開させたこと。戦後、引き上げ船の遭難で教え子を亡くしたことなどを話す。

浜川純平は那小小学校の五年生。正春おじいから聞いた戦争の話におどろき、悲しむ。

その後、おじいの意味を継いで教師になる。